

(仮) 円山動物園ポスト基本構想 第四回検討部会 議事録

平成 30 年 2 月 23 日 (金) 14 : 00～17 : 00

札幌市円山動物園 動物プラザ

○議事内容

吉中氏 第 4 回検討部会を開催します。水落さんが本日欠席で、事務局 が遅れて到着する予定です。本日は大きく「1. 報告」、「2. ポスト基本構想の内容」について意見交換を行います。前回お願いした WS の結果、アンケート調査の結果をまとめてご説明ねがいます。

ENV 子どもたちを対象にワークショップを行いました。対象は、小学校 3 年生から中学生までですが、中学生が 2 人、多くは小学生 3、4 年生でした。広報さっぽろや札幌市内の講演等でチラシを置いていただき、募集を行いました。早いうちに順調に集まってきました。定員 20 名のうち当日欠席があり、16 名が参加してくれました。最初は緊張をほぐすために、ゲーム形式で自己紹介などをしました。少し慣れたところで 4 人ずつ班に分かれて、職員の方に案内してもらいながら園内を見学させていただきました。たとえば、ニホンザリガニのバックヤードで、飼育、繁殖の施設で説明をしていただいたり、ホッキョクグマ館ではまだホッキョクグマがなかに入っていないときだったので、完成したきれいな、まだほとんど誰も入っていないところ見られる、特別に入れてもらえるということで、みんな喜んで見学をしてくれました。それから、は虫類、両生類館のセンターラボに行きまして、飼育、あるいは繁殖を行っているところを、動物園の本田さんにも解説していただきました。そこには、は虫類、両生類のエサとしてコオロギとかネズミも飼育していて、そのような裏側も説明をしてもらいました。お昼を挟み、午後からは、今皆さんがいらっしゃるこの会場を使って、グループごとにディスカッションをしてもらいました。子どもたちなので、そのまま意見を出してもらうのは少し難しいところもあるため、動物のイラストや写真を使って、動物たちがコメントをするようなイメージで見学した施設をおさらいしてもらいました。また、質問、疑問に思ったこと、

あるいは、もっとこんな風にすればいいとか、もっとこうすればよくなるということをみんなに考えてもらい、壁の模造紙にどんどん貼ってもらうというようなやり方で進めました初対面の子どもたちが集まり、緊張のためあまり意見が出ずに硬くなったらどうしようかと思っていたのですが、予想に反してもものすごく盛り上がりました。むしろコントロールするのが大変でした。抑えるのに苦労したくらい、みんな非常に楽しんでくれました。見学中にも、いろんな質問や感想を話してくれました。今回は、その一部ですが、いろんな意見を出してくれた中から、最後の方に取り上げております。見学、説明して話を聞いたところが主ですが、やっぱりニホンザリガニの施設や普段見られないえさを飼っているところなど、いろんなところが見られたので、かなりいろいろな意見を出してくれました。特に高学年や中学生になると、なかなか難しい動物園の運営の問題や、入場料についても考えてくれるなど、非常に聞いていても新鮮なイベントでした。まず、子どものワークショップについては以上です。

吉中氏 ありがとうございます。子どもワークショップについてご説明いただきましたが、質問等ありますか。内容でしたら続けて説明していただきます。

ENV 続きまして資料 2 の 1、2 の 2 をご覧ください。大人を対象とした市民ワークショップを行いました。札幌市民の中から無作為に 2000 名に参加のご案内を一斉に送らせていただきました。その中に、この資料 2 の 2 にあるような申込書と案内、チラシなどを入れ、参加を希望される方には返送していただくという方法を取っています。2000 名に送って、100 名もの方から申し込みがありました。2000 名のうち 5 パーセントも参加したいという人がいるということで、やはり動物園の何かに参加したいという方がたくさんいらっしゃると思います。その中から 26 名選出させていただいて、当日欠席があり 22 名の方にご参加いただきました。最初に申し込みをしていただく時点で、円山動物園にどのような社会的な役割があると思うか、円山動物園がその役割の期待に込えていると思うか、という質問をさせていただいています。他にも、性別と、年代を書いていただいております、できるだけ性別が同じぐらいになるように、それから参加をご希望いただいた方の年代もばらけるようにしました。一番若い方で 10 代、高校 3 年生の方から 70 代の方まで、こちらは均等に、ほぼ同じぐらいの人数になるように選抜させていただきました。その結果は、資料 1 の 2

を見ていただければと思います。午後からは検討部会でも発表していただいた動物専門員の本田さんに、動物園の役割の話をプレゼンテーションで解説をしていただきました。そのあと、子供ワークショップの時と同じように園内を見学し、センターラボやホッキョクグマ館等について説明いただきました。また同じようにここに戻ってきて、いろいろな意見を出していただきながら議論をしました。子どもたちのときには、どんどん意見を出してもらって壁に貼っていき、賑やかな感じで、みんなでつくり上げるところをゴールにして、そこで終わりました。大人の方々は最後にもう一度アンケート用紙を配布させていただいて、いろいろな感想をたくさん書いていただきました。それが6ページ以降になります。22名の方の書いていただいた文章を抜粋させていただいています。まず問い2では、この日のワークショップの進め方等についてお聞きしています。それから7ページ、8ページ、9ページにあたっては、動物園について、ワークショップを通して新鮮に感じたことや、新しく知ったことなどを書いていただき、問6では改めて、動物園が広く社会的な貢献をするにあたって大事だと思うことを書いていただきました。それから、10ページ目、問7では円山動物園がもっとよい動物園になるためのアイデアやご提案のほか、いろいろな意見をいただきました。それから、14ページ15ページをご覧くださいませんか。申し込みの前とワークショップの終わりに同じ質問をしています。14ページが参加前に書いていただいたアンケート結果の集計です。14ページの上側が、どのような社会的な役割があると思いますか、という質問。14ページの下側が、円山動物園が期待に込んでいると思いますか、という質問。それと対比する形で、15ページがワークショップに参加していただいた後に同じ質問をしたものです。僕も集計をしてみても驚いたのですが、特に一番下の「き」、「く」、「け」、「こ」ですが、自然や生き物と守る取り組みであるとか、絶滅が心配される動物の飼育や繁殖という項目がありますが、グラフの下側にある「円山動物園が期待に込んでいるか」という部分について、事前アンケートでは、「あまり」、「どちらともいえない」が大半で、赤い部分がありませんでした。ワークショップ後には、明らかに高くなっていることが分かります。これはもちろんこちらの狙いです。動物園の方々にバックヤードを見学、説明していただき、非常に理解していただけた部分だと考えています。これに関連して、自由記述

の意見にも、「もっとこういう部分を広報すべき」、「もっとちゃんとみんなに知らせてくれればいい」、「今日は非常に理解できてよかった」という答えをたくさんいただきました。まだまだ円山動物園には、このような活動を広げていただきたいと思います。こういう試みで浸透させるというやり方も非常に有効だったと考えています。細かいところは飛ばしましたが、全体としては以上です。

吉中氏 ありがとうございます。関連しますので、続いて来園者アンケートもご説明いただけますか。

ENV 続きまして資料3の1と3の2になります。3の2が、実際に園内で使ったアンケート用紙になります。資料3の1をご覧ください、アンケートは一番表紙の表のページに載せています。実施日は12月24日から1月22日。1月2日、お正月も含まれていますし、土日があれば平日もあります。当初は園内のいろいろな所にアンケートを設置するなどの方法を考えていたのですが、今回は開園時に門の所で「アンケートにご協力ください」と声を掛け、帰る間にアンケートに答えていただくという方法を取っています。今回は、日本人の大人の方を対象にしています。資料3の1の最後のページに、ステッカーの写真を掲載していますが、アンケートに答えていただいた方のお礼として、暗い所で光るステッカーを提供させていただきました。アンケートはお正月も挟んでいますので、東京などの道外の方も結構含まれていますが、多くは市内の方でした。こちら先ほどの市民ワークショップと同じような設問もありますし、来園手段などの他、先ほどと同じように「どのようなことを来る前に期待して来園されましたか」というような質問をしました。それから、アンケートは帰りに行きましたので、「円山動物園を見て回ってどうでしたか」という趣旨の質問をしています。それから、問2、問3以降は情報の入手手段、何が充実すれば動物園に行きたくなるかという設問です。交通の便や入園料も項目に含まれていますが、やはり動物をもっと近くで見られるであるとか、内容についての充実を期待されているところが見て取れます。問4では、どのような動物園であってほしいかという設問があり、当てはまるものを三つまでお聞しています。2番、3番、4番あたりは、もう少し考えればよかったと思ったところ。つまり、少し似たような内容の2番「希少動物の繁殖」、3番「自然や生き物の保

全」、4番「環境について学べる」のなかで3番が高い回答率になっていますが、この2番、3番、4番とはいずれかに丸をしていただくというもので、1番「レジャー性を重視した」というところよりは、特に3番あたりが高くなったというのが、実施の結果、分かりました。問7は、「どのぐらいの頻度で動物園に来ますか」という質問です。ほぼ毎日来るという方も4人いらして驚きましたが、やはりコアなファンの方もいらっしゃるようです。一方で、今回はお正月挟んでいるということもあり、初めて来たという方が割合的には一番大きくなりました。このアンケートのなかにも自由記述の欄がありましたので、問8として自由記述で挙げた意見も抽出して紹介させていただいております。以上です。

吉中氏 ありがとうございます。三つまとめてご説明いただきましたが、ご質問、ご意見等あれば出していただければと思います。いかがでしょうか。

福井氏 まず子どもワークショップについて。子どもからすると、動物園が種の保存だとか、絶滅危惧種の繁殖だとか、生物多様性の保全のための活動を一生懸命頑張っていることは、来る前はあまり知らない子が通常は多いと思います。一方で、このような場に参加するということは、たぶん親御さんがすごく熱心な家庭で、そのようなことも基本的には理解して来るのかなと思うところもあるのですが、実際に参加した子どもたちの動物園に対する受講前の印象は、どうでしたか。

ENV ワークショップで来園したときの動物園に対する印象ですか。

福井氏 ワークショップの前は、楽しみに来た、という感じですかね？

ENV 最初はやはり緊張気味なので、こちら緊張をほぐすように、最初は難しめの質問をせずに、「どんな動物が好き？」のような質問から入りました。福井さんがおっしゃるような、最初と終わりで比較できるような聞き方はできていない側面ありますが、参加してくれる子たちなので、動物園がすごく好きで、よく来るとい子もいますし、動物園以外でも野外の自然観察会に参加している子たちも何人か来てくれていました。外で虫を採った経験がある子でも、「えさにするためにコオロギやネズミを飼育している場所がすごく臭かった」という意見も出ていました。いい意味でびっくりしたのだろうし、動物園というのは、そういうものが必要なのだと、非常に新鮮に感じていたような気がします。お答

えになってないかもしれませんが。

福井氏 コメントには、「繁殖して自然に帰す」、「生息地に行ってみたい」、「密輸動物がどうなっているのか」など、動物園が野生動物の保全や生き物を守ることに關心を持ったものがちらほら見られます。子どもたちには「生物多様性」や「保全」という言葉は難しい概念ですが、おおよそかみ砕いて、「いろんな命がバランスよくつながって生きていることが大事だね」と言えば伝わる。また、「自分たちは自然のおかげで生きている」ようなことは、普段の食生活などから自然の恵みであることを理解できる。たぶん、動物園でそういう情報に触れる機会が大事で身近なのだと思います。動物園は、自然環境への一番身近な玄関口のような場になります。そこを強調していくことが、今後の円山動物園にとって重要になることを示す結果でもあると感じました。

ENV あと、よくも悪くも動物がいれば、そっちにみんな気持ちも引っ張られてしまうところがあります。わっと盛り上がるところはいい部分でもあるのですが、今回のホッキョクグマ館はまだクマがいなかったため、いろいろな工夫などを説明してもらうことができ、子どもたちもとても新鮮に、熱心に聞いていたので、それは面白い試みだなと思いました。どうせだったら中に行けばもっと良かったのにと感じました。

職員の方々が、いろいろな工夫や努力、考えていることが分かり、子どもたちからいい質問が出て、僕らも聞いていて非常に面白いと思いました。

福井氏 面白さと学びとを融合すると、いい動物園になるのだと思います。

ENV 高野さんに、いろいろアドバイスをいただきました。

福井氏 そうですね、環境教育の専門家が加わるといいですね。

ENV 子どもたちの緊張ほぐすゲームの取り入れ方など、高野さんから事前に教えていただきました。

吉中氏 高野さんがいつも関わっている子どもたちと比べて、違っているところや、同じようなところなど、ございますか。

高野氏 僕がやっているのは、やはりアイスブレイクによって、楽しむようなアクティビティーが多いので、ここまで落とし込んだことはやりません。その辺もお話したのですが、ちゃんとバックヤードを見て解説をされて、こういう意見が出てくるのだなと思いました。自分たちだけで見ていると、なかなか子どもた

ちは分かりづらい部分がやはりあります。この結果を見て、そのような説明を受けて回るとか、お話を直接聞けるという機会があると、こういう意見が出てくるのだということはこのアンケートを見て思いました。僕らはいつも、僕と子どもたちで回っているだけだと、やはりここまで落とし込めないのです。

ENV たぶん子どもたちの自由な発想よりも、説明の量が多ければ多いほど影響受けてしまうところがあると思い、説明をあまりせず、より自由な発想も大事にするという、バランスを考えています。ぜひ円山動物園さんには、今回のような感じを続けていただければと、実施してみても感じました。いろいろ反省もありましたけど、参考になるものがたくさんありました。

吉中氏 素晴らしいと思います。ぜひ、本当にいろんなところで続けていっていただきたい。学校単位でも、各学校でこれを参考に進めていくことや、あるいは動物園にいろいろな学校が来たときなど、いろいろなやり方があると思うのです。質問ですが、この子どもワークショップは、一応この基本構想策定に向けてのプロセスとして実施したと思うのですが、基本構想との関係はどのように考えられていますか。さらに今後の動物園さんの活動に生かしていただければ、いろいろな貴重な意見もいっぱい出てくると思います。

ENV 子どもに限らず、特に大人、市民の方々から、本当に具体的な意見をたくさんいただいています。直接、職員プロジェクトの中から出てくる意見と共通するようなものもあり、参考にさせてもらえる部分があります。ただ、当然ここで出た意見は、動物園の職員の方々の方向性と一致しているものもあれば、そうでないものもあります。職員プロジェクトにも還元し、場合によっては説明がもう少し必要かもしれません。たとえば動物園の方針やイメージと、少しずつがあるのであれば、むしろその部分を、より動物園としてはしっかりと主張をしたり説明をしたりというところかなと思います。よって、内容により基本構想に取り入れさせていただきますし、職員の方々にもお伝えし、動物園としての意見もしっかりと説明していただければと考えています。

福井氏 関連するのですが、既に円山動物園では、子どもたちを中心としたサマースクールだとか、バックヤード、飼育体験とか、いろいろ実施されていると思います。今回、外部のエンビジョンさんが関わり、また、高野さんのアイスブレイ

クなどの環境教育の手法を取り入れて行ったものは、これまで円山さんで行ってきたものと比較して、何か違いますか？ つまり、何か得るものとか、今後の基本構想につながるものとして、もしいくつかフォーカスが当たるものがあればお願いします。

事務局
(加藤園長)

今まで、多くの場合は場所の提供のみで、あんまり動物園は積極的に入っていったような感じではあります。マンパワーの問題もありますが、どこまで動物園が関わっていただけるのか、いくのか、というところの整理がまず必要だと感じます。要は、今回この子どもも大人もそうですが、うちの飼育の職員が中に入って話をしている。それをやることによって、その職員も成長するので非常に意義がある部分でもあります。ただ、そのマンパワーと時間とのバランスを考えないといけない。

福井氏

たぶん、今の絵で出てくるところの市民団体や、NGO、NPO、あと高野さんみたいなグループなどと、もっと密な連携によって、かなり伸びしろが出てくると思います。

事務局
(加藤園長)
吉中氏

たぶん。ただの場所貸しにならないようにすべきだと思います。アンケート調査の結果でも、事前と事後でだいぶ差が出ているものもあります。かなり効果があるものなのだろうという気がするので、それをどう構想の中に位置付けて、推進できるかですね。他にも何かありますか。

佐藤氏

動物園とか水族館に来たとき、飼育員さんが忙しそうであれば、たまに声を掛けさせていただいて、「この動物どうですか」と質問する。大抵の方はすごく丁寧に教えてくださいます。時間さえあれば、自分が世話している動物のことをもっと知ってもらいたいという気持ちを皆さんお持ちだと思うのです。だから、今回はそれがたっぷりできて、参加した方も得るものが多かったらうし、きっと話してくださった職員の方も、日ごろため込んでいるものを、いっぱい語ってくださったのではないらうかという雰囲気伝わってきます。

こういうことが、これからも定期的に続けられるような、ゆとりのある動物園運営ができればいいなと思います。人数が少なくて時間が足りないなかで、忙しく走っている人を引き留めるわけにはいかないので、人数が必要だと思います。

また、ざっと見ただけでも、「初めて知った」、「なぜもっと早く教えてくれな

かったの」という声がいっぱいあるということは、それだけ広報が不足していたのだと思います。そこに手回ってなかったということが、子どもたちもそうだし、大人の人からもいっぱい出てきているということ強く感じました。組織に広報の専門家もほしいです。

吉中氏 動物園広報局をつくるという意見がどこかにありました。1人なり、3人なり、分かりませんが、それで効果が10倍100倍になっていくのでしょうか。投資効果もあるということだと思います。

佐藤氏 若い方はソーシャルネットワークサービスをもっとうまく使っては、という提案をされていますね。そこに対応できる人材が動物園に今いるのかということ。マイナス面があつと言う間に広がってしまった経験も持っていますが、もしプラス方向の広がりだったら、ものすごい効果があったと思います。本当にもろ刃の剣だけど、それを上手く使いこなしていくことは、これから絶対必要なことなのだと思います。

事務局
(加藤園長) 実は、広報や、今のメディアをうまく使うというのは、動物園に限らず、札幌市役所全体の課題です。職員はそういうスキルはやはり持つ必要があると思います。

福井氏 職員、飼育スタッフの日常業務の中でのゆとりは、どのような感じですか。

事務局
(加藤園長) ゆとりですか。

福井氏 ガイドをするとか、何か教育活動に従事する時間を確保するゆとりです。

事務局
(加藤園長) アジアゾウが来ることもあり、去年と今年、飼育員を増員しています。今までよりは若干余裕が出てくる可能性はあります。そこをどう上手くやるか。人の数がいれば余裕が出るのか、仕事の仕方を考えるか、というのがありますから。そのへんをうまく回していくように考えなければとは思いますが。何か特別なことをするというよりは、普段やっている仕事のなかで、お客さんとコミュニケーションを取ることができればいいのかなとは思いますがね。

福井氏 これまでの飼育技術者には、あるべき姿の理解がまだ浸透していないかもしれませんが、本来動物に関わる飼育技術者、これからの動物専門員には、動物の健康管理、普段の日常的なルーティンワークにプラス、積極的に市民の前に出てきて、“自分の動物がこれだけ素晴らしいものなのだ”、“こんな取り組みをしている”というのを伝える機会が1日1回必ずあったほうがいいのかと思います。

ます。それは私が旭山動物園にいるときそうでしたが、1人1回は必ずもぐもぐタイムやガイドで何か話そうと決めていました。市民と話す機会が毎日必ずあります。やはりこれからの動物園は、そうあるべきだと思っています。バックヤードでいくら専門的な職人的なことをしても、保全施設と野生動物の繁殖施設の機能だけでは物足りないのです。一般市民に動物のすごさや保全の重要性を伝えるというルーティンを、みんなが大事だと理解するような体制や、指針が大事なのかなと思います。

事務局
(加藤園長)

そう思います。実は先週、旭山に行って坂東さんとお話をしてきました。旭山動物園では1日1回以上はそういうことをやる。さらに旭山は、建物のなかの設備の管理も飼育担当がやっているという話をしていました。要は、たとえば、カバ舎の水のろ過装置の管理。カバのお世話をしているのだから、その水の管理も自分で出来なきゃ駄目だろうという考え方で、そこを業者に分業していないのです。それによって微妙な調整をもやっているという。決して、うちよりものすごく人が多いわけではないので、やり方、考え方でいろいろなことができるかと思います。とにかく、もっと表に出て来ないと駄目ですね。

それとお客さんと同じ視線で、動物たちを見なければいけない。

福井氏

飼育技術者も展示物の一つ、伝えることが使命の一つという認識で、スタッフみんなが認識を強く持てば、かなり普及啓発の機能を発揮できると思います。

佐藤氏

あと、大人の方のご意見のなかに、「飼育員さんの当たり前をもっとみんなに知らせてほしい」というのがありましたね。きっと、「これは当たり前だよ」と、専門家の方たちが思っただけのこと、素人には「え、そんなことがあるのか」ということもある。だからバックヤードのコオロギにしても、「えっ、これって珍しい？」と思われるようなことが、もう驚愕の事実ということになる。そこをどんどん埋めていただけたら、動物園と来る人がもっと近くなれる気がしますね。だからといって、やたらバックヤードに人に入られたら困りますけどね。

事務局
(加藤園長)

バックヤードはたまに入られる。めったに入れないからいいのではないかな。

佐藤氏

そうですね。

事務局

プレミアム感があるからいい。

佐藤氏
(加藤園長)

いいですね。すごくプレミアムな体験なんだよって。

吉中氏 同じようなこと考えていたのですが、今回、アンケートやワークショップの対象となった方は、基本、興味のある方ですね。子どもワークショップも申し込んで来て。来園者アンケートはもちろん本当に来てくれている人ですし。市民ワークショップも無作為で選ばれたなかから、100名でしたか。関心がある人だからこそ、こんなに貴重な意見がいっぱい出てきて大変参考になると思うのです。

そうではない人の意見というのは、札幌市の別の調査で調べられたりしたことあるのですか。

ENV 市民アンケート調査で、来ている人、来ていない人分けずに5000人にアンケートを取っています。その集計はまだ終わってないと思います。

事務局
(神課長)
次回です。

吉中氏 はい、ありがとうございます。

ENV 今回の意識調査は、動物園以外の質問項目も含めた市民意識調査となっておりますが、動物園で実施した今回の来園者アンケートと一部比較ができるように、同じような設問を入れてあります。今回、来園した方の傾向と、来園者とは限らない一般の方の傾向とを比較して、何か違いが出ればいいと思っています。

吉中氏 分かりました、ありがとうございます。

福井氏 大人のワークショップの13ページのグラフについて、受講前と後で、特徴的だと思ったのは、参加者はやはり最初から関心のある結構コアな方だと思いますが、「レジャー性を重視した動物園」が1人しかいなくて、受講後に「楽しいところだ」みたいな感じは6人増えています。2番と3番の「希少種の繁殖、研究」が8から10に増えた一方、「自然や生き物の保全の取り組み」が18から15に減っていますよね。これは、動物園の域外保全と、たとえば円山原始林の保全活動のような生息地の保全活動が解離しているというか、まだリンクして理解してもらってないような印象を受けます。ワークショップで、たぶんニホンザリガニ、猛禽類や両生・は虫類のことも学んでもらったけれど、自然や生き物の保全に取り組む動物園が、むしろ受講後に減っており、意識が少なくなったように見える結果はなぜか。一方で、域外保全、種の保存に理解が逆に強くなったというあたりは、これからの動物園は、域外保全は生息地の保全活動を補完するものであり、地域の自然環境や世界の環境をしっかりと残して

いくことが大事で、そのために動物園は得意分野でお手伝いするのではないかと、そういう認識を市民が持つようフォローしていく必要があると思うのです。動物園の入り口的な機能が強調されたような結果になっている印象を受けるのですが、この辺りどうですか。

ENV この解析結果を見て、どう解釈するか悩むところです。実はこの設問は、三つまで丸をつけるのですが、相対的なもので「最初にこっちに丸をしたけれど、終わったあとはこっちに丸をする」みたいな感じで考えると、福井さんがおっしゃるように、こっちよりはこっちかなというふうな感じがします。

福井氏 両方選べない？

ENV ここは選択項目を三つに絞られているのですが、14、15 ページを見ると、項目のなかで「自然や生き物を守る取り組み」も、事後は圧倒的に増えてはいます。相対的に見ると、福井さんがおっしゃるように域外のほうに、比重はいつてしまって、生息地保全がそっちに引っ張られたようなところがあるかもしれません。相対的にではなくて、全体的にはどちらの活動も評価というか理解は深まったという感じです。この 14、15 ページは、それぞれの項目に分けて、5 段階評価で回答してもらっています。今、福井さんがおっしゃられたところは、「三つまで丸を付けてください」という聞き方が影響している気がします。

事務局
(加藤園長) 話を聞いたら、実はやっているではないかと思ったら、別な選択肢を選んでしまう。こっちのほうがやってほしいというふうに変えられる。

佐藤氏 また、先ほど言われたように、2、3、4 がちょっとずつ重なっているとすると、2、3、4 の合計でいくと、最初が 23 であとが 22 だから、2、3、4 ひっくりめたら、あまり変わらないという感じですよ。だから、関心のあり方はそれほど変わったのではなくて、ウエイトの置き方が少し変わったということでは。

ENV こっちのほうが足りないかなとか。

佐藤氏 この 2、3、4 が内容的に微妙に近い。

ENV もう少し、レクリエーションや他の部分の数もバランスを取るべきだったと反省はしています。

佐藤氏 保全の部分での関心が高いことは確かですよ。

吉中氏 これの結果はもう少し解析をこれから進められる感じなのですか。

ENV そうですね。たとえば今回アンケートで、事前と事後で取っている場合に、個々

の対応が本当は取れます。ただ、今のところは 20 人なら 20 人、アンケートであれば、全体をまとめて数字を出しているだけです。たとえば、事前アンケートで「期待している」と答えた人が、本当に期待どおりだったかどうかという変化を何か個々に対応させながら解析するほうが、実際には事前と事後の変化は見るのには、もう少し丁寧だとは思いますが、他の問題と対応させて、たとえばもともと保全に少し意識の高かった人は、どんな動物園を期待しているのかとか、クロス集計みたいなものもできると思います。やってみて意味がよく分からない解析になるかもしれないので、いくつか試しながら、少し傾向が見られるものについては、もう少し増やせれば良いと考えています。

吉中氏 母数が 22 名だから。

ENV そうですね。少し母数が少ないので細かいところは難しいです。

吉中氏 あまり数字でいっても、どれだけ意味があるのかは難しいところですが。14 ページの結果も母数は 22 になるのですか。これは 100 ぐらいですか。

ENV 今回はどちらも同じ 22 です。100 の集計もできます。また、さきほど説明をし忘れてましたが、市民ワークショップは 2000 人に出して 100 人ぐらい返していただきました。その中には来たことがない人や、何年も来てない人、あまり来ない人も参加していただけるように、バランスを取って来ていただいています。このワークショップは完全に自由な募集でしたが、よく来る方がやはり多かったかなと思います。

吉中氏 定量的というよりは定性的というか、具体的な意見とか、ワークショップをされて感じられたこと、職員の方にも対応していただいたので、職員の方がどう思われたか。そういうことが、実は効いてくるのかもしれないと感じます。そういうこともまた、あとの意見交換で出てくるかもしれませんね。あと、このアンケート、ワークショップで意見ありますか。

福井氏 たとえば欧米の動物園などは、保全活動に対してすごく力を入れているところしか市民権、国民権を得られず、行く側も投資して、入園料がいくら高くても、保全のために払うくらいの気持ちで、動物園に行く文化があります。日本にはなかなかそこはなくて。でも一方で入園料が高いと言って値下げを要望する人も少ないです。国民が動物園の保全活動に投資したいという価値を高めていくためには、たとえば入園料を高く設定したり、保全活動への寄付を募り、その

代わりにバックヤードを案内するなど、他の動物園でまだあまりやりきれてないところに着手するという発想があってもいいのかと思う。これからの動物園は、動物という価値のあるものを見てもらう。遊びに「来てもらう」から、尊い動物の保全活動に「ちょっとお金を落としていってもらう」くらいのことがあってもいいと思います。保全活動支えるため、市民の意識を少し引き上げる。このアンケートにも出ていとおりに、受講前と後で希少種の繁殖の取り組み、研究、保全、生き物を守る取り組みは上がっているのも、もっとうまくリンクさせていくといいのではないかと思います。

吉中氏 はい。よろしいですか。次に進めたいと思います。もう1点、次の意見交換の材料というか報告を受けて、そのあと意見交換ということになるかと思います。お手元の「札幌市円山動物園ビジョン 2050」と書いてあるものをご説明いただけます。前回からあまり日にちが経っていないのですが、前回の検討会でいろいろな意見をいただき、動物園さん、エンビジョンさんでご検討いただき、改定案といいますか、ビジュアル的にもパッと見た感じ、だいぶ変わっていると思います。そのものについて、まずご説明いただいて、そのあと意見交換ということにしたいと思います。では、このポスト基本構想、仮称ですが、概略、構成、構造、今、考えてらっしゃることをご説明いただけますか。

事務局
(補課長) 私のほうから簡単に説明をさせていただきます。資料4、A3の用紙をご覧ください。前回の検討部会では、大きく3点指摘があったかと思います。まず一つ目ですけれども、前半部分の内容が薄いこと。その内容であれば、どこの動物園でも出てくる内容で、それだと50年ぐらい前の動物園でも通用する内容ではないのかというのが、まず入ってきます。一方、後半部分については、いろいろ大事なものがあるということで、最初の部分には「目指す将来の動物園のイメージ」というものをまず置いたほうがいいのではないかと。動物園の理念は、しっかり最初に伝えるべきだというご指摘がありました。2点目ですけれども、各項目がありましたけれども、そこに書かれている内容が重複をしていて分かりにくいと。全体的な内容の整理、それから項目の組み換えとかくくり方の整理が必要ではないかというご指摘をいただいております。それから3点目ですけれども、今回策定する内容が、一目で分かるようなイメージ図、前回も付いておりましたけれども、それが分かりにくい、市民にも伝わりにくいとい

うことで、文章ではなく、コラムとか挿絵、そういったものも工夫しながら入れ込んで、分かりやすく説明できるような内容にしたほうがいいと、助言をいただきました。それから、ポスト基本構想の名称になりますけれども、前回検討部会では、経営方針というような言い方で出させていただきましたが、経営方針のところになります、「企業的な感じがするとか」、「経営者の方針というようなイメージで取られてしまう」、「市民が外に置かれているのではないか」というご意見がありました。検討部会では基本方針、ビジョンといった方がいいのではないかとご意見がございました。それからキャッチフレーズですね。キャッチコピーについても、いろいろ職員から出てきた案を皆さまにお見せしましたが、最終的には今回まとめているものが固まってから検討するという順番がいいのではないかとご指摘になり、そのような方向で今検討させていただいています。こうしたことを踏まえて、いったんビジョン 2050 ということで冊子を作らせていただいています。

それではまずページを1枚めくっていただきたいと思います。先ほどのご指摘に基づきまして、最初に基本理念を置かせていただきました。基本理念ということで、「生物多様性の保全」と「環境教育の推進」。この二つを柱にして、具体的にこういう理念でやっていくということをここで最初に載せたいと思います。それから、その下、「地域のために地球のために」。地域のためにということですが、前回まとめたもののなかで、円山動物園の役割という項目がありまして、札幌では、日本では、世界では、というような分けをして書いておりました。今回、原生林に隣接した円山動物園の特徴が分かる空撮の写真を入れ込みながら、スケールの、空間的に、動物園の役割というものをここで述べていきたいと思っております。それから右のページにイラストがあります。動物が下であって、保全、教育を中心に、いろいろなことを地域、地球に発信していくと。それから周りにはいろんな関係者がいますから、こういった方々と連携しているということをこのイラストで表しております。

それからページをめくっていただきまして、先ほどの基本理念の一つ目にありました「生物多様性の保全」ここでは「まもる」という言い方をしておりますが、これについて見開きで説明をさせていただいております。

次のページをお願いします。基本理念の二つ目にあります環境教育の推進とい

うことを、「伝える」という言葉で全部そう言うております。こちらも見開きで環境教育の推進を記載しております。

もう1枚ページめくっていただきまして、ここからは前回、今後の動物園の運営の方向性という項目がありまして、基本理念を進めていく上で重要となる「レクリエーション」「調査研究」をそれぞれ左に「レクリエーション」、右に「調査研究」ということで運営をさせていただいております。

ページめくっていただいて。ここでは動物福祉について整理をさせていただいております。動物を第一に考えて飼育することは、動物園にとっては当然のことでもありますし、責務でもあります。前回お出ししたものは、理念のところ整理させていただいておりましたが、今回は前にくるということではなく、後ろでしっかりと、当然動物の福祉をやっていきますということで、この位置で説明をさせていただきたいと考えております。

次のページになります。先ほどのイラストにもありましたが、基本理念を実現するためには、市民や企業、大学とか、いろいろな方々との連携が重要になってきます。ここでは関係者との協働、連携といったことを見開きで整理しております。

次ページめくっていただきまして、コレクションプランになりますが、こちらについては本日、お示しすることはできませんでした。現在、動物の種ごとに基礎データの確認をしております。先ほどの資料のなかに、資料5というものがございます。

基礎データということで、左側に各動物の評価項目が1から6までございますが、こういった基礎データを動物全種に関しまして、今整理をしております。資料5、園内検討会議、基礎データとありますが、こちらについては動物ごとに一枚一枚つくっております。左側には、保全に対する取り組み状況や、飼育の持続性という、それぞれ評価項目がございますので、それぞれ動物の種類ごとに今整理をして、最終的には、こういったものを今後継続して審議していくのかということで、コレクションプランを整理していきたいと考えております。それから、右側にコンプライアンスということで載せておりますが、これはいったんここで配置をさせていただいております。

もう1枚、おめくりください。最後のページになります。ここではビジョンを

実現するために、動物園、職員がどうあるべきか。それから市民、企業などに期待されている役割ですね。どういった市民、企業がどういった役割を担っていくのかということをご整理していきたいと考えております。具体的な内容は、前回の検討会ではお示しできませんでしたけれども、今回いったん案ということで、こちらに書かせていただいております。本日のご議論をこちらでさせていただければと考えております。

それから右側ですが、かっこ 2 ということで、整合性を図る札幌市の諸計画とそのポイントとあります。札幌市にはさまざまな計画がございます。たとえば生物多様性札幌ビジョンとか、環境基本計画、環境教育基本計画や博物館基本計画というものがああります。こういったいろいろな計画につきましては、当然動物園と関わる部分が相当ありますので、それぞれの計画と整合性を図るということで、ここでいったん整理をさせていただきたいと思っております。私からの説明は以上でございます。

吉中氏 ありがとうございます。難しいですね。このあと、意見交換で中身について具体的に項目ごと、あるいは全体についてご意見をいただきたいと思っております。今の点で、何か、この進め方おかしいのでは、なぜこうなのかなど、プロセス的なところで何かご質問等あればと思っております。中身も相当前回から変わっています。変わっているというか構成が大きく変わっていて、一つ一つの文言は、そのまま踏襲されているものもありますが。意見交換の時間をできるだけ長く取りたいと思うので、中身についてのコメントはあとに取っておいていただくということで、今のご説明のプロセスみたいなものについて、何かあれば、今お受けしたいと思います。

ENV すみません、一つ補足を。今日は A3 でつくっていますが、イメージしたのは、A4 見開きのものをイメージしています。ページを開いたときに、見開きでこの 2 ページ分で表現できるような感じのイメージなので、でき上がりはこのサイズではなく、この半分のサイズで開いていくイメージです。それから、デザインやイラストは私たちでは拙いので、色合いとか、デザインに関して、仕上げはもう少しプロの力を借りるなどして仕上げることを考えています。まずは大きな構成をイメージしないといけないということで、細かいデザインや写真などは今後進めていくとして、写真等についても、暫定的に動物の写真

とか、経過の写真をこんな風に挟み込んでいます。そのあたりも、たとえばコレクションプランの議論の進展によって、円山動物園が特に力を入れていくものであるとか、何かしら伝えたいものとか、そういうものを提案していただいて、写真もたまに選定したり差し替えたり、ということになろうかと思います。

吉中氏 では 20 分まで休憩します。

—一時休憩—

吉中氏 再開したいと思います。もう議論が始まっているようでしたが、ポスト基本構想案、資料 4、これについて皆さんの意見を出し合ってさらによりよいものにしたいと思います。次回は今抜けている部分についても事務局でさらに作業進められて、さらにバージョンアップ版が次回の検討部会最終回にて、ということだと思います。意見交換はまた長谷川さんのほうに進行お願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

ENV では、前回も本当にいろいろな意見を出していただいて、そのあともご意見をいただきました。もちろん全体の構成もちょっと変わっているのですが、ビジョン 2050 というような表現になっているところ、ビジョンという言葉は言葉としてはいろいろ出てきたのですが、これまでとの違いとしては 2050 年までという年度を入れ込むことで少しイメージが加わったということですか。まずはこの辺り、ビジョン 2050 と 1 ページ目に開いていただいたところの一番上の部分、このあたりはいかがでしょうか。この辺りは吉中さん例えば何かこういう数字を入れたりすることでの効果といいますか、ご意見いただけますか。

吉中氏 最初の頃にお聞きしたような気がするのですが、今度作る基本構想は大体何年スパンぐらいのものを考えているのか。あまり明確なお考えはないような感じですが、やはり大体何年ぐらいで目指すのかのイメージがあってもいいのかという気はしています。2020 年とか 30 年だと少し近すぎる。2100 年だと、もう他人事になってしまっていて全然関係ないなということもあり、このくらいがいいのかという気がしています。

また、ここで出されている「自然と人間とが共生する社会を築く」とか、「自然と人とがもっと仲良くなれる社会に」というサブタイトルみたいなものは、

生物多様性の戦略計画でも「自然と共生する社会を 2050 年までに実現します」というのが名古屋で決まっていますから、それとはうまく時間的にはマッチし、テーマ的にもマッチするのかなという気はします。

事務局
(加藤園長)

いいとは思っているのですが、2050 と書かれているのであればもうちょっと自身のハードルを上げないとダメかなと思います。30 年後なので。今の内容は少し現実的に見えすぎることです。

例えば種の保存で言うと域外保全と野生域だけじゃなくて、域内保全にもわれわれは力を注ぐみたいなことも言わなければだめなのかなと思います。ボルネオプロジェクトのように、円山動物園がカナダのホッキョクグマの保全活動を一緒にやるなどです。結局動物園で一生懸命繁殖したところで、生物多様性は保全されないわけです。動物園の世界でも多様性はある。保たれるけれども地球環境上では保たれないからなど、30 年後の話なのでそんなことも言いながら全体的に少しハードルを上げたほうがいいかと思いました。

吉中氏

そうですね。多様性の保全では生態系の多様性も守りますというふうに書いてあって、中を読んでいくと動物園以外のこともやるのだというのは、なんとなくわかりますが、少し弱い気はしますよね。右のほうは域外保全と野生域ってなっていますけど。

ENV

基本的にこれは書きながら考えたのですが、「域内保全」という言葉は必要ですか。

事務局
(加藤園長)

最終的にはやっぱり域内保全にいかないよ。

ENV

そうですが、福井さんに少しお聞きしたいのですが、僕の感覚では域内保全という言葉は保全分野では聞かない言葉で、動物園用語かと思っています。どちらかというと域内保全はごく当たり前のことであり、生息地保全が大前提で、域外保全がちょっと特別な枠組みかなと思うのです。域外保全が動物園の中で出てくる言葉で、域内保全という言葉を使うとかえって枠組みが狭く感じるかなと思っています。その言葉を使わずに、「生態系の保全」とか「環境の保全」、「生息地の保全」という言葉で表現している方が広く、構想が動物園だけの内部資料ではないことを考えると、「域内保全」という言葉は使わない方がいいのではと捉えているところがあります。その辺、福井さんはどう思いますか。

福井氏

おっしゃるとおりだと思います。単に域内と域外に分けたら理解しやすいとい

うことだけで、域内という言葉を使わなくても生息地の保全とか生物多様性の保全という言葉と等しくイコールです。だから括弧書きなり脚注なりで、その動物園の域外保全が域内保全につながる、補完するというような説明を書けばいいのではないですかね。「補完」って書いてありましたよね、確かどこかに。

福津氏 域内は確かに全然分からない。初めて聞いたぐらいで、分からない。

ENV そうですね。域内保全という言葉は。

事務局
(加藤園長) 用語どうでもいいのだけど、ここには動物園での繁殖のことでは生息地しか書いてないから、だから円山動物園ではボルネオでのオラウータンの生息地の保全に力で行っていきまますということも書いてあるといいのではないか。

ENV そこまで具体名を出しますか、ボルネオとか。

事務局
(加藤園長) 特別な動物だけでなくでもいいけれども、要はそういう生息地保全もやっけないとだめだということ。いくら動物園で繁殖したって生物多様性は保全されない。動物園の世界の中だけのこと。

ENV 「生息環境と生態系をまもる」というレベルではなく。

事務局
(加藤園長) もうちょっと、具体的にはっきり分かるようにしたい。

ENV ボルネオとか。

事務局
(加藤園長) ボルネオではなく、動物園の枠の中だけでわれわれの使命は完結するのではないということを明確にすべき。それには資金繰りも考えなくてはいけないのだが。市の税金でカナダのホッキョクグマを守るわけにいかないから、ではその資金はどうするかという資金繰りは考える必要がある。きっとそういうようにしていく必要が 2050 を目指には必要と思う。

福井氏 そうですね。全く同意するのですが、読み込めばそれは書いてあると言えば書いてあるのですが、やはりもう少し分かりやすく書いた方がいいのでしょうか。右側は域外保全と野生復帰みたいなのでオオワシの絵が書いてありますが、動物園の外でこんな環境保全・生息地保全をやっている・これからやるという書き方が分かりやすいでしょう。

ENV それは例えば野外での保全活動の写真も入れ込む感じでしょうかね。

吉中氏 ビジュアル的にはそうかもしれないですけど、文言ももう少し必要なのかもしれないですね。もう少し明確に書いた方がいいのではないですかね。動物園を超えてやるということがはっきり分かるように。

事務局
(加藤園長)
福井氏 目指す姿が今から出来るとか出来ないとか考えないほうがいい。
32年後、30年あればいろいろなことが出来そうですね。

事務局
(加藤園長)
福井氏 技術も進歩する。
10年、20年、30年ごとのスパンぐらいで考えて、確かに30年後には現地のホッキョクグマあるいはミャンマーのゾウの保全に繋がるような宣言というか、意思を示すというのはありかもしれないですね。あとは、もちろん円山の原始林や札幌周辺あるいは北海道の自然生態系の保全や未来にあるヒグマやシカの問題なども含まれる。このような部分をもう少し展示を通して伝えていくとか、円山動物園の普及啓発の部分、道内・国内・世界で担当する役割みたいなものや、地域の自然に根ざした活動について分かりやすくイラスト、写真、活動で伝えてもいいかもしれないですね。これ写真などは変わりますよね？これ。アメザリですね？

事務局
(加藤園長)
福井氏 外来種だから。
外来種として、アメザリとか、アライグマとかナメクジとかいますよね。そんなものも場合によっては駆除なのか、札幌周辺の自然環境の自然再生として取り組んで行くのか、検討も可能。

ENV その辺りの具体性はどうでしょうか。例えばアライグマの写真とか、もちろん入れられますし、マダラコウラナメクジですよね。使ったらインパクトはあると思うのですが、実際そこに入ってきたとき、「えっ、円山こんなことやっているの」というところとの兼ね合いはいかがですか。例えば確かにコラム的に入れると1事例としてそういう写真の付け方はできると思います。ただ、そこに挙げてしまうと、「実際、円山はやっているのですか」とか、「いつやるのですか」という話にもいづれはなろうかとは思いますが。そのあたりのイメージはどうですか。

事務局
(加藤園長) 一応これ最後に文言では書かれましたね。個体数管理や外来種の除去、拡散防止にも関わっていきます。

ENV そこに、例えばもちろん代表例としてはアライグマなどだと思えますけどね。
福井氏 シカやヒグマの個体数管理など保護管理もですよね。

ENV 当然2050年ぐらいを目指した少し長期的なものの例としての紹介と、一方で具体的なイメージの落としどころをどのくらいにするべきなのかというところ

福井氏 ですね。ここはどうですか。例えばアライグマやナメクジの写真を入れるのは、少なくとも原始林のニホンザリガニの保全活動がここに入ってきた方がいいですね。

ENV はい、ニホンザリガニを実際に紹介するうえで必要かもしれません。また、地域のものでいうとコウモリとかですね。僕らも一緒にやらせてもらっていますけど、アメリカザリガニの対策とか、あるいはカメとか。

福井氏 そういうのも紹介してもいいのではないですか。実際に、何を目指して取り組んでいるとか。

ENV では、もう一度戻っていただいて、「ビジョン 2050」とこの一番上の文言は、さしあたりこの感じで進めていくということによろしいでしょうか。

事務局
(加藤園長) 「自然と人がもっと仲良くなれる社会」と、「自然と人間が共生する社会」の2本を並べる意味があるか。

佐藤氏 ダブっていますね。

ENV 重なっているからいらない。

福津氏 2050 はもう決定なのですね。

事務局
(加藤園長) 決定ではないけど、そこに対して今意見はありますか。

福津氏 新幹線ではないけれど、そんな先のことは分かんないと感じる人はいないでしょうか。もしくは、そんな悠長なこと言って、そんな先のことをどんなにハードル上げてもできるかどうか分からないという人がいないでしょうか。印象として。10年先って激変していますよね。自然だってテクノロジーだって。激変しているのに、という印象を持つ人がいないかなと思ひまして。

ENV むしろここは2050というよりは、例えば2030とかもう少し短くするとか。もう少しめど付きやすいところに決める。

吉中氏 あるいは2030だとSDGのゴールと合うと思うのですが、二段階にするという手もあるかもしれないですね。2050年はこういう理想を目指すと出した上で、2030年には具体的にこれまでをやりますという。そういう書き分けをするという手はあるのかもしれないですね。

事務局
(加藤園長) これが例えば30、50となった後で、では具体的にどうやって進めていくのかを実施計画5年分ずつ作っていくが、そのときの最終目標が2050でイメージしたものを置くのか、2030に置くのかという違いにはなる。

佐藤氏 30年って自分が生きていくかどうか分からないけど、今度、円山動物園に来るゾウさんはやっと大人になって30代半ばですよ。そんなふうに動物たちがずっと生きていくことを考えたら、そんなに無茶苦茶な目標ではないかと思う。

ENV 2050でもいい。

佐藤氏 逆にここに2050と掲げたのは、そこを越えてからもずっと動物たちに責任を持ちますという決意表明なのだということが伝わればいいと思う。これが具体的な計画だとは誰も思わないわけで、これに対して、さっき言われたように5年とか10年というスパンの具体的な計画は立っていくわけです。最初に考えたのは、いろんな細かい枠をなくして円山動物園がどうしたらいいか、その理想を考えましょうということで、ここの話が始まったと思います。そのことと合わせて考えてみても2050は、特に大型の動物たちにとっては本当にこれから先、人生半ばという時期。だから、やはりそこまできちんと考えなくてはいけないのだろうという気がします。だって、ゾウは4歳で来るのですものね。一番小さいのがそうです。一番年上の母ゾウでも26歳です。

事務局
(加藤園長)
佐藤氏

そうですね。平均寿命60年というから、来年来るゾウさんたちみんな30年後まだバリバリ元気であるはずですからね。

吉中氏 まず2050、丁度いいぐらいかなという気がします。2050年に目指す姿を園長がおっしゃったようにもう少し過激に、ドラスティックに書いてしまうというのも一つかと。もう一つは、そうは言ってもそんな先までどうやって行くのかと、なんとなくボワっとしてしまふ。例えばそのプロセスみたいなのをどこかに書いて、2050年に目指すからバックキャストすると2020年30年40年は「どんなことを目指します」、「どんな施策をここではやっていきます」、「そのために実施計画は10年ごとに更新していきます」のような、2050年に向けての実施の道筋みたいなのを少し書くと、初めて読む人にも2050年は遠そうだけど実はそんなに遠くないのだなと、着実にやってかないと間に合わないよね、というのが分かるかもしれないですね。

福井氏 自分も同じ気持ちです。佐藤さんのおっしゃった動物に対しての責任と、やはり未来の子どもたちに対しての責任という意味で、これぐらいのスパンで物事考えたとき、吉中委員長がおっしゃったような、例えばタイムスケールで矢印を右上に引っ張ってきて10年、20年、30年ごとのスパンで、その各区切りで

円山動物園がどう発展しているか、最終的には 2050 年のときに、例えば、動物園が地域の野生動物に関する自然環境保全センターみたいな役割を持って成長している姿を掲げる。それは単に今の既存の動物園のみならず、地域の生息地内保全の活動に携わっている人々と協力しながら進んでいるという姿になる。地域のシカやクマ、ニホンザリガニ、猛禽類の問題や保全活動を扱っている拠点になっていることを期待します。そういう研究ベースでも、環境教育ベースでも、保全活動ベースでもイメージしておきたい。そんなイメージをイラストか、時間軸を使って表現すればいいのではないかなと思う。この時点ではこうなっています、ここを目指します、みたいなイラストですね。

ENV よかったらもうちょっと一緒に考えてご提案いただきたいのですが、その場合に、例えば福井さんがおっしゃられたように拠点になるのが 2050 年ぐらい 30 年ぐらい先だとして、その 2 ステップ下ぐらいはどんな感じのイメージですか。

福井氏 まずは、最初の 10 年では、いろいろな NGO や NPO の人がいっぱい入り込んできて、大学とか学術研究所も入り込んで、コラボレーションが始まっていて、そのような保全・研究・教育活動への取り組みに対する知名度が広がり、何らかの結果を出し始めるのが 2040 年とか 2050 年かもしれません。

ENV 吉中さんがおっしゃるような中間のステップというのは、例えば 10 年 20 年として書くのがいいか。矢印で流れを大体配分しても、結局のところ 10 年後の、20 年後の目標のようになるのかもしれない。流れが 2050 年に向かう中で、例えば順番でもいいかと思うのですが、最終的に少し大枠をつけたときにその途中ぐらいのイメージでしょうか。

吉中氏 本当に具体的な施策はまさに実施計画なり、これから決めていかれるのだと思います。例えば今後 5 年 10 年では重点的にこんな分野に取り組んでいきます、この部分にまず力を入れます、それができたら次にこの分野に広がっていきま、みたいなものでいいのではないのでしょうか。今、福井さんおっしゃったのは、まずはみんなでコラボレーションとかパートナーシップをとにかく増やしていきます、底辺を広げます、調査研究の底辺も広げます、このような土台作りが始まって 2050 年を目指す感じでしょうか。あまり僕もイメージできてないのですが、あまりこの具体策みたいなのに行かないということですか。

ENV 例えば動物園として、「まずしっかりベースを作ります」、「底辺を広げていき

ます」というところから、みんなを巻き込む感じで広げていきます。その先にあるのが拠点というような感じのステップで、イメージしたらいいということでしょうか。

福井氏 はい。動物の福祉や飼育の技術も 50 年くらい経つと当然ぐっとレベルが上がっていく。繁殖個体・飼育個体は、地域個体群としての地球上のコレクション。この将来を把握してしっかりと作って、その目指す数値目標などの具体的な部分を今後入れるかどうかは次の議論になると思います。どういうところに目標設定して出していくのか。ここで宣言していいのではないのでしょうか。絶対にこの時点ではやっている。ゾウの繁殖はこの時点ではもう成功しているぐらいのイメージで考えたい。

ENV 例えば、今、大枠にわけて保全の話、教育に関する話、そして動物福祉的な話かと思います。例えば一つ、保全に関しては 2050 年ぐらいにはもう拠点になるという感じで、それを教育についても、こんな感じのステップでイメージしているというようなイメージでしょうか。

福津氏 2050 年に向けて」というビジョンを作ったときに、それぐらい長期スパンで考えなくてはいけないことを意識して考えたものと分かれば、悠長な印象は持たないのではないかと思います。ずっと先の話ではなく、「4 歳のゾウが 34 歳です」というアピールもいいかもしれません。動物園のことはそれぐらいのスパンで考えなくてはいけないということを見た人が感じられるような、イメージがあるといいのではないかと。

吉中氏 ゾウの成長と年表を合わせるの面白いですね。

30 年後にこのゾウと、その生息地はどうなっているか。

福津氏 そういう議論の中で構想ができていくというイメージができるといいですね。

福井氏 円山動物園は、この地域で考えると、ヒグマの保護管理、生息環境の保全や人との共存についての果たす役割は、大きいものがあると思います。札幌市としても円山動物園としても関わる。

一方で、世界中で日本の動物園はホッキョクグマを飼育個体としてプールしている最大の国です。つまり、ホッキョクグマの域外保全、ないし、飼育個体群の運命を担うのは日本だと言っても過言ではありません。その中でも繁殖実績からして、円山動物園がそれをリードしてやっていくのは使命だと思います。

2050年レベルで、気候変動によってホッキョクグマの生息数がどれくらい減っているか。そういう意味でいうと、待ったなしの30年間になってくると思います。実際、ホッキョクグマについて真偽は別として、気候変動によるいろいろな影響について報告もあがって来ています。それらにストップかける時間は30年もないのです。10年ごとにこうする、というようなスピード感です。例えば、ホッキョクグマやヒグマ、ゾウ、ニホンザリガニなどの象徴的な生き物の未来をどう背負っていくのか、このような典型的な動物種の事例を同じ時間スケールの中で、実際に実現できるかは別として、保全して行くことを宣言していいのかと思います。「意識してやっぺいこう」というような宣言をするのがよいと思います。

福津氏 「域外」という言葉は聞いたことがないと思ったけれど、字を見たら分かるので、これを機会にだれもが当たり前に知っている言葉にしてもらいたいと思います。これからの円山動物園の役割が分かりやすい言葉かもしれないですね。一般的ではないけれど、これを機会にみんなに知ってもらおうことで、思いが伝わるような気がしました。

福井氏 アンケート結果を活かすのであれば、ワークショップを受ける前後での意識の変化を踏まえて考える。例えば10年くらいでは札幌市民の来園者、市民以外の来園者、あるいは外国から来る中国や韓国等の人にも、円山動物園が目指す自然との共生や、いろいろな生き物が生き生き暮らす地球環境を作っていくということを来園者に理解してもらいたい。札幌市民全体にはまだ浸透してないかもしれないが、動物園に来てくれた人は、動物園を見学する時間の中で分かってくれる。それをどうやってさらに広げていくか。人側の要因と自然側の要因って、なかなかうまくつながらないですけど、つなぐ人が頭を働かせれば、必ずうまく進むと思う。

ENV この文面で考えると、「ビジョン2050」と最初のところにあって、大枠の目的は「自然と人間とが共生する社会」が2050年の目標ということです。自然と人間とが共生する社会というのをまずイメージをして、2050年に達成する。それに向けての一つ前のステップ、さらにもう一つ前のステップぐらいのことを考えるイメージですよ。場合によっては、今お話に出てきたようなゾウの成長であるとか、福井さんがおっしゃってくれたような保全の拠点となるまでの

道のりなど、いくつかの例が組み合わされている。また、福津さんがおっしゃられたようにいきなり先のことを考えているわけではなく、もう少しきちんと長いスパンで考えていることが、読んでくれた人にも伝わるようにしたらいいという感じでしょうか。

その途中段階の設定が結構難しいと思っているのですが、できるだけご協力いただきながら考えてみたいと思います。今のところそんな感じのイメージでいいでしょうか。

福井氏 この木のイラスト、イメージ像がすごくよくできていて分かりやすいです。これの各項目での「保全の目標」、「教育目標」あるいは「動物飼育目標」、「市民に対しての理解度」、「学びの目標」のような項目ごとに分けて、時間スケールの中でそれぞれの項目の目標みたいなものをもう少し具体例を挙げて、10年スパン、20年スパン、30年スパンで表すような。このイラストを時間軸でも考えるような感じがいいのでは？

ENV 今のところ、ページごとに見開きで「保全について」などと説明してあります。それぞれのページの一項目というか一部分にもう少し大きな時間の流れのステップアップみたいなものを入れ込むという感じでしょうか。保全については、例えば福井さんがおっしゃってくれたようなイメージで目指していること、別のページでは、例えば動物福祉のページをめくると30年間ぐらいかけてこういうところまで目指しているということなど、ステップアップが2~3項目ずつぐらい出てくる感じでしょうか。どの項目も全部それが書けるかという心配はありますが、そういう伝え方はできるかなという感じでしょうか。

福井氏 専門員を中心とした現場の人たちが考えて、最後に園長や課長、係長らと協議して立てた方がいいのではないですか。10年スパンくらいで具体的に。

事務局
(加藤園長) どちらかという、前にも話をしましたが、職員は現時点から考えていってしまうのです。ですから30年後どうなりたいというイメージを立てるのがなかなか難しい。

福井氏 旭山の場合は、とりあえず展示目標でしたが、14枚のスケッチがあって、10年20年後のスパンで実現していったということがあるので、青写真をとりあえず作っておく、それを展示のみならず保全面・教育面・動物福祉面、あるいは地域とかの連携面で考えてみてほしい。「絶対こんな無理だよ」みたいなこ

とでも議論して、目標を立てた方が必ず近づけると思う。飼育技術者の方でそのような議論をしてもらった方がいいかもしれないですね。

ENV 高野さんどうですか。環境教育分野というか普及啓発分野で30年ぐらい先をイメージできますか。僕もそういうことをやっているのですが、確かに深く考えてみたいところではあります。ぜひその辺りの項目はご協力いただければと思います。30年後ぐらいに、例えば子供たちのイメージでもいいです。一般の人に対してこんな感じの社会に「もう少しなってくれればいいな」みたいなことはありますか。

事務局 (加藤園長) 30年後はどちらかという環境教育は普及活動しなくてもみんなが自然に入る生活になっている。

ENV それが当たり前のようにになっているということですね。

高野氏 僕らの役割が無くなればミッション達成っていうことですよ。

事務局 (加藤園長) だから保全しなくても動物たちが昔のようにそこで暮らしていければ、それが最終目標です。

吉中氏 そうですよ。

福井氏 動物園自体は必要悪ということで、なくなってもちゃんと役割果たした状態まで行けばいいわけですね。さすがにイラストの中に動物園がなくなるっていうのはないですが。

ENV 仕事が無くなるぐらい進歩すればね。吉中さんいかがですか。

吉中氏 おっしゃる通りだと思って聞いていたのですが、理念として二つ、「多様性の保全」と「環境教育の推進」です。例えば少なくともこの二つについては2050年の具体的な目標というか、目指すところをまず出して、それに向けて進んで行くというのがいい感じになると思いました。また、全体構成の話ですけど、コンサベーションとエデュケーションというのが最初に出てきて、これら二つの理念、そのあとに「レクリエーション」「アニマルウェルフェア」「コーポレーション」とありますが、まだ並列のままなのでこれ奈良の優先順位をどうするのか。つまり、コンサベーションとエデュケーションの理念達成のためにレクリエーションをしっかりやっていかなくてはいけない、ということをもう少し分かるようにした方がいいのかなと思う。

ENV 構成というか、見せ方として工夫が必要ということですよ。

目次に置いたときに関係性がどうなのかと。

そうですね。福井さんからイラストの話をしていただいたので、前回いろいろと提案を受けて、我々としても紆余曲折いろいろ悩みながら、いろいろなことを考えて進んできたところではあります。

悩んだ点は、吉中さんもおっしゃられた配置関係です。各項目の強弱具合、例えば、「レクリエーション」「調査研究」「保全」「教育」が四つ横並びのところを円山動物園職員の方々の議論の中で、やはり保全と教育を強く上位項目に置く感じのイメージにしました。一方で、動物の福祉にはしっかりとこだわって書きたいということで、今回は保全と教育を四角で囲んで動物福祉を丸で囲んだだけでした。前回分かりづらいとお叱りを受けましたけれども、その配置関係をいろいろ考えた中で、ありきたりかもしれませんが「木」というのはそういうのを表していると思いました。

根っこの部分、支える部分というところで「動物の福祉」を配置してはどうかと。枝を広げて葉を広げてというようなところに「保全」や「教育」を置く感じで、木が円山動物園を表しています。広げていく部分あるいは根幹にある幹の部分に「保全」「教育」を置いてしっかり支えるところに「動物の福祉」を配置するというイメージを考えてみました。その周囲にこのイラストでは人がいたり、背景の遠いところに地球環境の遠い部分をイメージしているホッキョクグマやゾウなどにも広げていきたいし、身近なところにはエゾシカや小さくニホンザリガニが書かれていたりするのです。身近なところもしっかりと枝を広げ葉を広げていきたいというイラストのイメージを最初に考えました。この表現をもう少し分かりやすくするため、いろいろなパターンで検討を繰り返し、周囲に「地域」や「地球」「空間」を円で表しながら、そこに関係する「学校」「市民」などを配置し、根っこの部分が「動物の福祉」ですが、ここに「保全」や「教育」を配置しました。

最終段階でレクリエーションと調査研究の項目をどこに配置するのか非常に悩み、広がっていく一番外側の部分が保全や教育を表すという案でイメージし、幹の一番中心の部分が保全と教育としました。このほかいろいろと試行を繰り返して作成した案ですが、皆様のご意見いただければと思っています。

今、吉中さんがおっしゃられたような強弱関係といえますか、配置関係をこう

いうところで説明する。目次もそうかもしれませんが。それから全体構成の中で順番や見せ方などで分かりやすく表現していくこと、という作りかと思いません。今、「保全」と「教育」は見開き一面で大きく取っていて、「レクリエーション」と「調査研究」は半ページずつにすることで、強弱を考えています。ただ順番に並んでいるだけなので、もう少しデザイン的なものを大きく変える方が分かりやすいのかもしれませんが。また、後半ではありますが「動物の福祉」は一面広く使うことで、取り組みとしてはたくさんしっかりと補強するという構成を考えたところです。

少し整理させていただくと、目次も含めてイラストでそれぞれの項目の関係を示すこと。もう一つは、全体のレイアウトやデザインで関係を示すということ。この辺り、吉中さんがまだ少し並列で分かりづらいというご意見かと思いますがどうでしょうか。

吉中氏 よくできていると思います。いろいろな色がついた葉っぱが5枚あって、何も書いてないので、例えばここに、レクリエーション・リサーチ・パートナーシップス・コーポレーション・コレクションプラン・コンプライアンスがあるといいのかもしれない。

ENV 葉っぱのそれぞれにそういう項目を配置していくのですね。

吉中氏 葉っぱにあるレクリエーションを通じて栄養をもらって、それが保全取り組み(幹全体)に繋がるような。

ENV 保全と教育は中心の所で、その周りにそういうものを配置させる。

吉中氏 保全、教育を達成するためにレクリエーションが必要です。コンプライアンスが必要です。ちゃんとしたコレクションプランも作る必要があります。パートナーシップスが必要なのですということからすると、葉っぱのところで表現できることかなと思いついた次第です。

ENV 私たちも最初は項目があてはめられるように5枚、配置してみました。今、吉中さんがおっしゃった様なイメージを持っていて、その中にレクリエーションと調査研究が入ってくるのだけでも、逆にコレクションプランなどが同じように並ぶのか、というところも悩ましいと思ひまして。連携はどちらかというところの円が表しているところがあるので、連携という言葉はここには上がっていません。連携は木の周りの円が表しているところで、葉っぱの中に項目を入

れる場合、レクリエーションと調査研究、ほかに何か三つほど項目がうまく並べばいいと思います。その辺り、いろいろ考えながら表現の難しさを感じているところですが、ぜひご提案を。

高野氏 水とかだめですかね。レクリエーションと調査研究も吸い上げて、幹の保全と教育が進歩して、花や葉っぱが実る。木なので、例えば植物学的な循環があって、常に新しい保全教育方針が出てくるような。

ENV 根からも吸い上げながら。

高野氏 太陽でもいいのですが。うまく言えないですけど、そんなイメージもいいかな。やはり調査してくと深まっていくと思うので、それが保全と教育にどんどん生かされていくようなイメージです。描きづらいでしょうか。

福津氏 この周りの白いところはこのままでいいですか。「市民」「来園者」「学校」とか。

ENV ここはもう少し言葉の選び方もあるかもしれません。

佐藤氏 イラストの方がいいですね。出てくる要素、木の先、葉の先にある要素もちょっと。

ENV 学校とか来園者とか。

福津氏 この並びが、ここがいいのか。内容的に。

佐藤氏 葉っぱの先にくっつけたら、それはちょっと。

ENV 根本的に木の表現は大丈夫でしょうか。そこもいろいろ悩んだ結果、木の表現にしてみるという提案なのですが。

佐藤氏 やはり世界樹とか生命の樹とか、すごく根源的なイメージがあるから、木をうまく使うのはいいのですが、うまく使いこなせているかが問題ですよ。

福井氏 自分も実は高野さんとほぼ同じことを考えていたのですが、水を吸い上げて成長するイメージがよいのでは？ それを作り上げているのが「調査研究」「レクリエーション」で、その先に「普及」とか「保全」が成り立つイメージがよいと思う。円山動物園へ思うことは、これからの飼育技術者、現場が動物福祉をしっかりと支えていく。水をやっているのか、支えているのか、耕しているのか、分かりませんが、その中心に飼育技術者がこの動物福祉を支えているようなイメージ。円山動物園のイメージがそこにあった方がいいかなと思う。

左上にあるのは外部の「博物館」と「動物園」ですよ。「円山動物園」が出てくるところは、この動物福祉を支える根っこの部分で、それを支えるスタッ

フなのかなど。水をやっているのか、耕しているのか、根っこなのか。

ENV 真ん中の木全体が円山動物園を表しているイメージで、真ん中に動物と書いていますけどこのどこかに円山動物園と書く。

福井氏 「人」が出てきた方がいいと思います。「人」がこれを作るので、飼育技術者中心とした円山スタッフですね。

吉中氏 大地がいいのかもしれないですね。

地面はまさに全体の実施を支える基盤。そこに動物たちがしっかり根を張っているけど、地面の中では、例えば最後の実施体制にある、特に左側の動物園の目指すべきことみたいなのが書いてあったりしますが。

事務局 (加藤園長) 吉中先生が今言った最後の実施体制の左側は、組織としての動物園と、そこで働いているわれわれはどうあるべきかが、別々書いてある。

吉中氏 そうですね。

福井氏 あともう一つですけど、実ができて、種ができたときに、実や種が何を意味するのかみたいなのが、これは多分美的センスだと思うんですけど。

何かを実現し、種が生えて遠くに飛んで拡がって… 次の何か子どもたちの心なのか、自然との共生なのかにつながっていく。

ENV 花、植物は、本当にいろいろな比喩表現ができて文章表現が非常にしやすくなりますね。花を咲かせるとか実らせる、結実させるとか、うまく種もそうですし、表現できるネタというか材料はあると思います。最初のページのイラストのところがあると、周りにほかの木が生えていたり、芽がでていたりということも絵としては表現できるかとは思っています。イラストにする場合、盛り込み過ぎると分かりづらくなることと、内容がブレないかというところを気をつけないといけません。ENV いかにかそこを表現するか。いやでも非常に参考になります。

福井氏 取捨選択が必要です。この文章のところで、「みんなを楽しませる花を咲かせ、成果という果実を実らせます。」その成果が何かというのはもう少し具体的に、どういう成果なのか表現するのがよいですね。

やはり人の心と子どもたちの未来と動物たちが健康に暮らせる自然環境みたいなところだと思います。種が地域、世界に拡がってみたいな。

福津氏 そういう内容が木の周りにちらばっていて欲しいなと思いました。「市民」「来

園者」「学校」とかじゃなくて。

福井氏 成果ですよ。そうですね。

福津氏 葉っぱの先、実の先にそういう言葉がちりばめられているのがいいと思う。

ENV 福津さんがおっしゃられるのは、今この円のところは連携、地域から広く外側、地球や世界をイメージしていて、連携する相手として研究機関や博物館というイメージなのですが、それよりは成果としての何か周囲にもたらすようなものを木の周辺に配置するというイメージですか。

福津氏 そうですね。私はその方がいいのではないかなと思います。

ENV いろいろな意見を引き出すために時間を割きたいところですが、ずっとイラストの話だけというわけにもいきませんので、構成の中でもう少し分かりやすくというのは何かありますか。

事務局
(加藤園長) 分かりやすくというか、並んでいるのがどうかということです。基本理念として、保全と教育があって、それに対しての「守る」「伝える」はあるのですよね。これは基本理念の二本柱ですよ。その次に「楽しむ」「極める」があるけれど、それが同じレベルに並んでいいのかな。

ENV それは例えば、変えるとすればどんな感じがいいですか。

事務局
(加藤園長) 目次的に1ページ、2ページと並んでいくと、どれも同列に扱っていることになり、構成に何か工夫が必要と思う。

吉中氏 僕のイメージとしては、あくまで目指すのはコンサベーションとエデュケーションなので、それを実施するために必要な手段はそのあとに並んでいるということのような気がします。そう言い切ってしまうというのが、今回のこの構想の肝みたいのところだと思うのです。言っているのかわかりませんが、コンサベーションやエデュケーションの実施のため、その下にレクリエーション、リサーチ、アニマルウェルフェアも基本ですよというように、構想が階層みたいになると少しいいのかなと思います。

ENV 僕の解釈では、項目、名前だけで「守る」というのが並んでいますけど、例えばこのタイトルのさらに上に、理念1とか理念2という応急のタイトルをつけて、レクリエーションなどについては、達成するための手段みたいに小タイトルをつけて構成をしていく。大きな理念の一つ目に保全があって、二つ目に同じ理念として教育があり、次に上のタイトルを変えながら達成するための調

査・研究であるとする。そこは少し入れ子にしたほうがいいのかと思います。
また、悩むのが動物福祉のところですが、そこも少し変えるのかと思います。

事務局
(加藤園長)

直接書くかわかりませんが、福祉は、「実現のために」と「実現のベース」に位置付けないといけない。一方、コレクションプランはいわゆる生物多様性の保全と環境教育を推進していくためのキャスト。保全していくため教育をしていくためには、どういう動物たちをわれわれが見なくてはいけないということをもとめたもの。

ENV

同じように、実施体制のあたりはだいぶ性質が変わる項目かと思います。書き方もここはフォントサイズを小さくしたり、表現も少し硬めというか、これまでに比べれば書類のような表現になっています。ページの印象として、少しここは違うイメージだという表現はできるかなと思いますが、実施体制については今回初めての項目なので少しそこを見ていただきたい。時間も限られていますので、この辺りに何かご意見ご提案あれば。

福井氏

これ必要ですかね？

ENV

この項目自体。

福井氏

2番のほうは資料としてあったらいいという気がするのですが、左側に書いてあることは前段で書いてあることの繰り返しの部分も多いし、どうなのでしょう？ 例えばその下の動物園、市民、事業者の求められる役割のところの中で、いろいろなものが動物園の下に混在していますが、市民とどういうふうに連携しながらやっていくかみたいなものは、コラボレーションのところで整理できる気がしますよね。

ENV

この辺りは前回も少しありました。例えば条例化を目指したり、手続きのようなものの中で、少し定款的なところといいますか、しっかり書いてある部分も必要ではないかという位置づけかと思います。

事務局
(加藤園長)

ここは多分動物園というよりは、園長はどういうふうにするべき、飼育、動物園はこういうふうになっている、常に最新の技術を身につけ、研究を怠らないとかということを書く。園長は世界中の動物園のことを見て動物の福祉について常に考えると、そういう宣言をする場所なのかなと個人的には思います。

吉中氏

そうするとその前のコンプライアンス等どうですかね。

佐藤氏

すみません一言言葉でわからないのですが、この実施体制の事業者はどうい

う意味ですか。

事務局 (加藤園長) 支えていただいている企業の皆様です。

ENV コンプライアンスも含めていかがですか。位置づけと内容、必要性は。

事務局 (加藤園長) 金子先生もおっしゃっていたように、市役所の内部のこととして予算を獲得したり人を獲得したりするためのツールになる部分なので、これを全部生かすということはないかもしれませんが、例えば動物園の一番最初にあるこういう予算執行部分とか、財源の確保とかというところはなんらかあったほうが良いと思います。

ENV それはたとえば、前段のほうはもっと写真とかも盛り込んであって一般向けといますかいろんな動物園関係者でない人にも見てもらえるというようにと思えますが。やはり、いくらか重複していたり、内容的にかぶっていてもこのこういう書き方はやっぱり必要でしょうか

事務局 (加藤園長) 整理はしたほうが良いと思う。薄まってしまうので。

ENV これは市役所の内部的に使っていくためにも、下の横のこういう表現でこういうような載せ方をするということですか。

福津氏 ここは園長書かれたらいいですよ。私もちょっと前回のオブザーバーの発言が気になって。これが今後新しい動きをするときにとても大事な資料になるのだよって言われたことです。だから本当はこういう文言入れたらいいというのがあったら逆にちょっと教えていただいて、これからのビジョンで円山動物園としてお持ちのものを、硬い文章で書いて入れておくということをされたらどうですか。

事務局 (加藤園長) それもそうなのですが、職員の心構えみたいのを整理する必要があるのかと思っています。みんな同じ方向を向いて進んでいくためには、みんなどういう気持ちでやっていくべきかと言うことが分かるようにしたい。

吉中氏 やっぱりこのページあったほうが良いと思う。ビジョンとか人はどうなるのか、この動物園で働いている人たちはどうなのか、ということ、園長さんだったり飼育員の方々だったりとかそういう立場の人を入れておいたほうがしっくりくるような気がします。

ENV 確かに園長おっしゃられるように動物園が主語で動物園はという意味ではほかの部分も、基本的にみんな円山動物園が主語の文章なので、ここはもう少し

落とし込んで園長はとか、動物園の職員は、というような主語にして少し表現を具体的にするのがいいかもしれません。

一方、市民、事業者というのはこんな感じのイメージでいいでしょうか。記載する内容としては市民はこう、事業者はこうというのがいいですか。

福井氏 実施体制とコンプライアンスの部分は、まとめることはできますか？

ENV 確かにコレクションプランと同じページというよりはコンプライアンスは実施体制に近い位置付けでしょうか。実施体制のところは文章量が多いのですが、意味合いとしては確かにこちらのほうが近いですね。

事務局
(加藤園長) コンプライアンス後ろは性格が違うので、少しわれわれで検討をさせていただきます。

ENV それから少し順番が前後しますがコレクションプランのところはまだ今からということですが、イメージ的にはこの一面使って書いていくという感じの分量、内容になりますか。

事務局
(加藤園長) 170種全部を載せられないとは思いますが、多分見開きでは終わらないでしょう。

ENV 例えばどんな感じのことがここに出てきますか。

事務局
(加藤園長) ここで収まるような中身をここで書いて、残りは資料ということになる。

事務局
(加藤園長) どこまで行けるかわからないけど目指すべきは、われわれはこういう理念を持っているのだから、そのためにはこの種は何としても30年後に飼育して行かなければいけないとか。この種は今いる子が長生きしてくれて、頑張っているうちはいいけどその先は入手も難しいからいなくなっちゃう、そういうような話ですよ。

福井氏 トリアージというか優先順序は必要ですよ。もう大体あがってきますよね。それを絞ってやったほうがインパクトがある。

ENV ここにはもうかなりは具体的な動物名がリストアップされるということですか。

佐藤氏 多分びっしりリストに載ってもわからない。だから具体的にこの動物はどうなっているのだろう、どうしたいということを重点的に扱っていただく。やっぱり見開き2ページでもあった方がわかりやすいってことですよ。

ENV それは次回出てきてまた議論ということになると思います。イメージ的には動

物園に今いる動物については載っているという感じですか、それともそれこそ 2050 年ぐらいを目指して今いないような種も含めて動物園がどういうものを飼育していくというような感じのものか。やっぱり 2050 年ぐらいの状態をイメージして書きますか。

事務局 (加藤園長) ものによってはあるかもしれない。だから、例えば北海道の自然のことを伝えようとしたときには、今いないけどもその動物種が足りないからこの動物種は新たに導入するということもあるかもしれないが、基本は今いる子たちです。

吉中氏 説明の中にどういう考え方でコレクションプランを作るんです、というのがわかりやすく書いてあるといいかもしれないですね。

事務局 (加藤園長) まずベースとしてこういうことで組み立てています、ということは必ず書きます。

福井氏 具体的に入ってくる動物種は、例えばここに絶対入れなきゃならないというのは大体あがると思うのですが、どれですかね？

事務局 (加藤園長) 大型動物は大体入ってきますね。

福井氏 ゾウ、ホッキョクグマ。

事務局 (加藤園長) ホッキョクグマだね。

福井氏 地域で言うとヒグマとかですか。

事務局 (加藤園長) あとアジアの話で言えばオラウータンをどうするかそういう話になってくる。

福井氏 猛禽類や両生・爬虫類とか。

ENV これに関してはあまり 2050 年のイメージではちょっと書けないということでしょうか。

事務局 (神課長) 50 年では…、10 年ぐらいで今はイメージしている。当然 10 年続けようと思うものは 20 年 30 年続くというものだと思う。

福井氏 WAZA や JAZA では、PC ソフトで今シュミレーションして出していますよね、50 年後ぐらいの個体がどれだけ繁殖して残っているか。PM2000 で、それぞれの種に対して 50 年後の将来予測、それはしているのか？

事務局 (神課長) まだそこまでいっていない。

福井氏 種別調整しているものだったらありますよね？ 円山動物園さんはある時点でどれぐらいの個体数を増やしているのかみたいなのは。ゾウとかホッキョクグマなどカリスマティックな種から地元の動物まで、何かのプランっていうのは

そういう、50年を掲げるのだったらこれぐらいの個体数を増やして、これぐらいを他の動物園に出しているとか、そのぐらいの宣言をしてもいいかもしれない。「目指します」だから、漠然と「50年後も増えていたらいいよな、いたらいいよね」ぐらいの感じに留まってしまっている。

事務局
(加藤園長)
ENV

とりあえず今は10年先を見ていく。

そうするとやっぱりこのコレクションプランのところも少しそれより前のページとは毛色を変えてリスト的な感じに書くしかないのでしょうか。ほかの所はやっぱり2050年をイメージした表現になっているかと思いますが、コレクションプランのところはそこまでの書き方にはならない。

事務局
(加藤園長)

一つは今生息地別に計上していくじゃないですか。その環境を伝えていくためにはこういう種が必要ですねっていうことは基本的には記載する。

ENV

例えば動物福祉の面とかを考えたときにスペースを確保するという意味では、ある程度数も関係してくるかと思うのですが、2050年なり動物園の理想のものをイメージしたときには大型種はこれぐらいでとかというような感じのものがあるのですか。将来的なイメージだと思うんですけども、その辺りは確定できる感じですか。

事務局
(加藤園長)
ENV

あとは入手の可能性とか。

そうすると場合によっては減らしたりするということにもなる。

事務局
(加藤園長)

減らしたりすることもある。スペースとかケアの濃淡を考えたときに減らしてくことも選択肢には入る。

ENV

そこはまた次回実際に出されてきたものでまた議論させていただきたいと思います。また吉中さんにも提案いただいたイラストや、配置関係のところも検討します。今の感じだとレクリエーションや調査研究と同じように、葉っぱの一つにコレクションプランを書くのがいいのかというところがあり、さらに、2050年ぐらいまでのイメージでコレクションプランが出てくるのか、次回の整理となる。

吉中氏

コレクションプラン作成の考え方みたいなのが何かあったらいいんじゃないかと思う。2050年を見越して、そのためには、野外の絶滅のおそれあるものは積極的に対応していきますとか、道内の固有種に重点を置いてきますとか、思いつきでお申しわけないですが、そういう基本的な考え方を書ければ書いて、じ

やあここ 10 年ではこういう具体的な方針でいくかというのがあるとわかりやすと思う。

佐藤氏 目次を組んでみて、大項目とその中に入る小項目というのでわけていくといい。今は見出し全部同じ大きさですけど、見出しの大きさちょっと変えるだけでも見た印象は変わります。

ENV いいかどうかわからないですけど、番号をふるということもあると思います。最初に番号 1 番として基本理念と書いて、その後は 1 の 1 とか。この場合には、保全とか教育とかというのは同じ項目で、場合によっては調査研究とかレクリエーションは実現するためにという必要な手段みたいな感じで別の項目欄として、動物の福祉あたりに関しては括弧 2 とかでまたわかる様な形で記載したらいいのかと思います。

佐藤氏 大項目に出すだけ重要なことなのか、それともどこかにくつつくものなのか、こういうことを検討していただいて目次を出してみるといい。

ENV そのときには、実施体制は少なくとも違う項目になると思うので、コレクションプランがやっぱり同じように違う番号、新しい番号になって目次になる。

佐藤氏 その辺は専門家にお任せするしかないのかなと思う。こういうふうにしたいと一番に考えてらっしゃる方たちにお任せするしかないのかなと思います。やっぱりそこでこう大項目、小項目の体裁が付いてくるとちょっと考え方も整理されるという気がします。

福井氏 番号とか、色もそうですが、その項目ごとに最初の木のイラストをもっと簡略化したもの、他との関係性が視覚的にわかるようにロゴみたいなものを入れていくとか、あるいはその項目だけをハイライトするとか、工夫があったらいいと思う。イラストみたいなもので、レクリエーションの位置づけを説明したり、その上に保全と教育があるのだけっていうことを説明できればページがわかりやすと思います。

福津氏 葉っぱの色と項目の色とを合わせたらいんじゃないですか。さらに、葉っぱに項目入れたらいい。

今ずっとおんなじ色で統一されているけどこれがこう章立てごととか、あとは最初の理念の葉っぱと関連付けてタイトルバックの色も変わってきたりするとすごい印象が変わる気がします。

ENV 葉っぱを5枚5項目こういうふうに並べられるような配置にはなっていませんけども、この項目が場合によって少なかったりとかすれば、木は木でもうちょっと葉が茂ってる感じの表現にしたいと思います。葉っぱは大きな葉っぱを2枚ぐらい強調して配置するとか。高野さん、福井さんおっしゃられたように水の流れとかほかのものを表現しながら、それでレクリエーションや調査研究を入れるようなものになれば、ほかのページとも関係も整理できると思う。

福井氏 レクリエーションとか研究とかを手段と捉えるならば、葉っぱって手段のイメージになりますね。光合成してエネルギーを蓄えて幹を太くするっていう手段だからそういう意味では手段が葉っぱできてもいいのかもしれない。

ENV ちょっと前後してきましたけど、時間ももうそんなにありませんが、守る、伝えるとかの個々の部分で何か気になるところとかご提案ありませんか。

吉中氏 1点いいですか。語尾ですけど、いろいろあります。目指します、工夫します、取り組みます、これをどうするか。書きわけなのか、あるいは積極的に関わっていきます、貢献しますとかにするか。

ENV それはどっちかですね。むしろどれもそう統一していくのか、統一しているとちょっと飽きないかなとも思いますが。

吉中氏 例えば円山動物園が中心というか、ほとんど自分でやりますという理念の部分と、ほかの人にだいたい期待しているものがあり、それをかき分ける。

ENV ニュアンスということですね。

吉中氏 表現が混在していてちょっと気持ち悪い感じがする。

それと、園長さんがおっしゃったようにハードルあげるように書くかですね。

ENV そうですね、もうちょっと言い方に、やりますとか。取り組みますだと達成しなくても取り組んでいればという表現ではありますが、そこはいくらかあえてそう書いていく。そのほうがいいということであれば他のところも達成しますとか、実行しますとか、やりますという言い方に変えていく。

事務局 (加藤園長) ビジョンだから、努めますはやめたほうがいい。

ENV 努力っぽい含みを持たせた言い方はしないですか。

事務局 (加藤園長) 目指しますとか実施しますとか言い切ったほうがいい。

ENV 実施しますはより具体的だと思うのですよね。目指しますでもまだ弱いと言えれば弱い気がします。

事務局
(加藤園長)
佐藤氏 決意表明だとすれば目指しますもやめるとか。
「関わっていきます」とか言われたら「関わるだけ」かいていう感じになりますね。

ENV 今のとこどれもそのような感じの含みは若干残している表現にはなっております。

事務局
(加藤園長)
吉中氏 何か自信なさげですね。
多分最終的に動物園で作成して、パブリックコメント受けて、まだ変わっていくと思うのですが、せっかくわれわれこうやって集まって議論しているので、「検討部会ではこうしている」というふうに使っていただいて、検討部会としてはとにかく強く実施すべきだという意見が強かったのでこう書きましたという様にしていただければいいと思います。そしてこれでまず戦っていただくというのではないかという気がします。

福津氏 すいませんちょっと気になっていることがあって、実施体制のところの左のページの四角いところなのですが、これからの円山、2050年に目指す動物園はっていう内容の割に下が緩すぎてですね。今まで散々これだけすてきな提案をしてきた中で目指すものはこれなのかってちょっとあれってというような。こういうのだったらこの四角はあえてなくても本当に事務局からの思いを載せたほうがいいと思います。もうちょっと攻めの姿勢で行くのであれば四角の中がちょっと緩いと思います。

ENV ここじゃなくても構わないということですね。

福津氏 園長の思いをここの代わりに入れる。

ENV 園長よろしくお願いします。

福井氏 園長宣言。決意表明がいい。

事務局
(加藤園長)
ENV わかりました。
ほかに何か。

福井氏 「情報公開」について。積極的な情報発信によるオープンな動物園を目指す。発信するということで動物の生き死について。生まれた、死んだ、今こういう目的でお見合い中、あとはなんか病気になって治療してます、そういうことをオープンに情報公開する。そういうことをどこかに書いた方がいいと思う。今回の基本構想のきっかけはマレーグマの件であり、そういう元となった関連す

る事項はしっかり市民情報公開して、その上で、動物園をより親しく身近に感じてもらいたいということをどこかで強調してもいいと思う。

ENV 項目としてなくなったというか少し埋め込んでしまいました。広報の必要性を少し実施体制等の中で取り込んではいっていますが、福井さんおっしゃられたように、広報というと運営的なことになりますと、情報公開とか発信ということで項目建てしてもいいぐらいかとも思います。レクリエーションとかがあって日本語で言うと伝えるとかぶってくるころではあるのですが、教育とは違う意味での発信を半面ぐらい使って取り入れるというのは重要かとも思います。そういう意味では何度も出てきた葉っぱの1枚として発信とかというのもあるかとも思います。

事務局 (加藤園長) 福井さんがいった生き死にの話だと、「伝える」のところにしたほうがいいかな。
ENV それに関しては教育的な話ですね。

事務局 (加藤園長) 死の話ですね。
福井氏 円山動物園は、みんなの動物ですよと。みんなの動物だからみんなの動物のことをちゃんと伝えますよということです。

事務局 (加藤園長) だから生き死にですね。動物は生きているから、必ず死がやってくるんだっていうのは伝える。

ENV そうですね、ちょっと情報公開という感じではなくて発信といいますか、例えば調査研究とかでも伝えるということで、連携のところでも表現は盛り込んでいるつもりではいるのですが、もう少し具体的に発信とか情報公開というような言葉を盛り込みたいと思います。

福井氏 円山動物園の動物で起こっていることは札幌市民がみんな知ってほしい、市民が自分たちの飼育している動物でもある、というぐらいの考えを共有する。そういう想いが共有できるようになるためには、発信していくということでしか成し遂げられないと思うので、むしろもっと気にしてくださいと市民に言うぐらいの感じでいいと思います。

佐藤氏 アンケートの中でも知りたいって、もっと教えてほしかったっていう声いっぱいありましたね。こんなにすごいところなんて知らなかったとか、見せてほしかったみたいなのがあった。

福津氏 幸い「伝える」のページには少し余裕ありますね。

佐藤氏 やっぱり広報頑張りますって宣言しちゃいますか。

福井氏 広報部門と教育だと思えますが、飼育技術者、専門員がどんどん前に出て、やっぱりもう少し強調したほうがいいのかなと思います。なんかバックヤードに隠れちゃっているみたいなのじゃなくて、どんどん市民の前に出て話して知ってもらおう。

福津氏 これ見る人はそこ知りたいでしょうね。

福井氏 私たちに何でも聞いてくださいくらいのこと言ってもいいかもしれないですね。「何でも聞いてもらえれば、何でも答えるよ！」っていう感じで。

ENV 他はいかがでしょうか。

福井氏 細かくなりますが、アニマルウェルフェア、動物福祉についてのところ。ここは動物、地球からの預かりものの幸せとか、そういう動物の幸せを科学するみたいな感じの部分が入るのかと思う。これを「担うー動物園で暮らす動物たちへの責任ー」のところに入れてもよいかと思います。幸せへの責務とか預かりものに対してのレスペクトが当たり前のことなんだみたいなことが書かれるとよい。

ENV タイトルの下辺りのもうちょっと大きな項目のところぐらいで。

福井氏 そうですね。地球からの預かりもの、預かった動物の幸せを果たすとか、そういう決意ですね。絶対幸せにするよ、命を預かっているよということ。

あと「診察や治療」、細かい話なのですが、診察も治療も同じような言葉であるので、健康管理とかに変えた方がいい。

治療を含む健康管理とか、もう少し飼育という部分での健康管理がベースにあるっていう意味合いがあった方がいい。いきなり治療から始まるから病気が出るのも当たり前みたいに見える。むしろ獣医はいないほうが動物園はいいわけだから。治療が強調されないほうがいいと思う。

ENV そうですね健康管理、確かになんか予防的なニュアンスが必要ですね。

福井氏 獣医がひまな動物園のほうが本当は動物には幸せです。

ENV では、次回にむけて、現在まだ空欄であるところ等を皆さんに協力していただきながら、書き進めて最終版を完成させて行きたいと思います。

では吉中さんお返したいと思います。

吉中氏 ありがとうございます。皆さんありがとうございます。今日の議事はこれで

終わりです。次回は3月12日です。今日いろいろ建設的なご意見が皆さんからいただきましたので、それをうまく表現していただいて、今作業中のところも頑張っていて次回に修正版というかバージョンアップ版が出てくるということになります。次回、そこで決めてしまうというようなものではないと思いますが、それを基にまた意見交換をさせてもらい、どこまで行けるか見通しを次回でつけたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

(了)